

ルイス・キャロルの子ども時代

—— ディアズベリー時代を中心に ——

平 倫 子

序

チャールズ・ラトウィジ・ドジソン (Charles Lutwidge Dodgson, 1832—1898, 筆名ルイス・キャロル, 以下キャロルで統一) の子ども時代を調べてみたいと思っていたところ, 1979年, アン・クラークによる『ルイス・キャロル伝』がロンドンの J. M. デント社から出版された。これまでの彼の伝記の主なものは, 1898年キャロルの死後間もなく出版された甥のスチュアート・ドジソン・コリングウッドによるものと, 1954年デレック・ハドソンによるものがあったが, いずれも子ども時代の資料に乏しいうらみがあった。クラークはルイス・キャロル協会の主力メンバーとしての立場をフルに活用し, 保管されている古記録に可能なかぎり接し, それまで顧みられなかった事実をも事実ゆえに提供している。この点に着目しながら, キャロルの子ども時代を, 生れてから十一歳半ば (1843) までをすごしたディアズベリーでの時期に絞って概観してみる。以下クラークの新著のその時代をあつかった部分のあらまし (奇数番号) と, 私見 (偶数番号) とを交互に組みこみながらすすめてゆく。

1

父チャールズ・ドジソン (The Rev. Charles Dodgson, 以下ドジソン師で統一) は, 英国国教会の牧師職の多い家系に, 1800年スコットランド南部のラナークのハミルトンで生れ, 1825年オックスフォードのクライスト・チャーチで修士の学位を取り, Studentship を得, 大学の数学の教師となった。しかし間もなく結婚のためこの職を失う。というのは十九世紀後半まで, Students は独身でなければならない, という規則があ

ったためである。彼は1827年4月5日、ヨークシャーのハルのクライスト・チャーチでランカシャー出身のフランシス・ジェイン・ラトウィツジと結婚する。両家は十七世紀には貴族と姻戚関係をもっていたアップー・ミドル・クラスの家柄で、二人はいとこ同志であった。結婚後、チェシャー州ディアズベリーのオール・セント・チャーチのリヴィング職（オックスフォードのクライスト・チャーチ・カレッジの学寮長や参事会員の管轄下にある聖職禄のこと）を得て、ディアズベリーに移る。

当時ディアズベリーは一つの独立した教区ではなく、周囲六村を合せて一つの礼拝堂管轄区を形成していたが、9000エーカーに人口1500人を擁する区域がドジソン師の担当であった。ディアズベリーは、鉄道がすでに敷設されていたワーリントンから南へ約十一キロしか離れていないにもかかわらず、文明からは隔離され、外界とは有料道路で結ばれていた。工業都市リヴァプールやマンチェスターからもそれほど遠くないところでありながら、工業化の波に洗われることがなく、近隣に駅がふえ、自動車道が交差している今日でも、なお田舎らしさを保持しているところである。

2



ディアズベリーはなお牧歌的であるとはいえ、角度をかえてみるならば、当時のイギリスの社会情勢は、経済成長を遂げる夜明け前の、すさまじい混乱をきたしており、技術革新、自然破壊など産業革命により生じた一大変化がイングランド中西部および北部に集中し、石炭の採掘や鉄道の敷設、運河の建設など、人間が自然を支配する産業が急速に進められていた。リヴァプールやマンチェスターなどはそのようにして出来た典型的な新産業都市である。1825年ストックトンとダーリントンのあ

いだに鉄道が敷かれ、1830年にリヴァプールとマンチェスターも鉄道で結ばれ営業を開始する。それに刺激され、1851年のロンドンでの第一回世界万国博覧会まで鉄道網はイギリス国内で急速に拡大されることになる。

3

モルファニー通りにあるディアズベリーの牧師館は1819年、地方の建築家トマス・ハドックによって建てられたジョージ王朝風の建物で、玄関ドアの上に半円形の明りとり窓がついており、落ち着いた装飾をほどこしたポーチが、地味な建物のアクセントになっている(ハドソンによれば、1870年にその建物は塔をのぞいて大規模に改造されており、キャロル記念のステンドグラスのある建物は、父親が牧師として説教をした教会そのものではない、ということである)。その建物は1884年(ドジソン一家は1843年すでにここを引きあげている)空家であった時火災にあい、内部を焼失し、井戸だけがもとのままである。

かつてその井戸のまわりに中世風の中庭のある設計図をもとに建てられた牧師館は、かなりの程度まで自足できる設計であった。家はL字型で、牛小屋、馬小屋、上が洗濯物干し場になっている馬車置場などの付属の建物が中庭をとり囲むように建ち、内部は、七つの寝室、二つの居間、二つの台所、一つの書斎、そしてとりわけ立派な教室とから成っていた。教室はドジソン師が牧師補としての収入を補うため塾をひらいたためのものである。家のまわりは家畜のための牧草地があり、さらにその向うには見わたす限り麦畑が広がっていた。

4

1860年キャロルは「炎の中の顔」(“Faces in the Fire”)と題する詩の中で、その麦畑を回想している。その詩の中の一句“Mid Seas of Corn”(ただしこれがあるのは一部改作前の最初の詩のみ)を、クラークは伝記の第一章のタイトルに用いている。この詩は、チャールズ・ディッケンズの編集による週間文芸雑誌 *All the Year Round* (『一年中』)の1860年2月11日発行の42号に載ったもので、もともとはその年一月に、ドジソン家の家庭回覧誌“Mischmasch”(“ごたまぜ”)のために書いたもの

であった。その後1869年、詩集 *Phantasmagoria* の、真面目な詩のみを集めた第二部のほうに、一部改められて収められた。改作前の詩は、『キャロル日記』(R. L. グリーン編、グリーンウッド・プレス社、1971年改版)の pp. 148—150 に再録されている。それによると、第一連が

I watch the drowsy night expire,
And Fancy paints at my desire
Her magic pictures in the fire.

第二スタンザの一行目が

An island farm, 'mid seas of corn

となっていて、第六スタンザに

'Tis now a matron with her boys,
Dear Centre of domestic joys :
I seem to hear the merry noise.

があつて全体が十四連になっている。その後、最晩年になってキャロルは、今までに書いた詩のいくつかを新しいタイトルの詩集にまとめることを思ひ立ち、*Three Sunsets and Other Poems* (1898) という題の詩集を出版する。その中にこの詩も入っているので、ナンサッチ版『キャロル全集』に収められた“Faces in the Fire”をみてもいいことにする。(改作後は上に示した第六スタンザは省かれており全体は十三連になっている。)

Faces in the Fire

THE night creeps onward, sad and slow :
In these red embers' dying glow
The forms of Fancy come and go.

An island-farm—broad seas of corn—
Stirred by the wandering breath of morn

The happy spot where I was born.

The picture faded in its place :
Amid the glow I seem to trace
The shifting semblance of a face.

'Tis now a little childish form—
Red lips for kisses pouted warm—
And elf-locks tangled in the storm.

'Tis now a grave and gentle maid,
At her own beauty half afraid,
Shrinking, and willing to be stayed.

Oh, Time was young, and Life was warm,
When first I saw that fairy-form,
Her dark hair tossing in the storm.

And fast and free these pulses played,
When last I met that gentle maid—
When last her hand in mine was laid.

Those locks of jet are turned to gray,
And she is strange and far away
That might have been mine own to-day—

That might have been mine own, my dear,
Through many and many a happy year—
That might have sat beside me here.

Ay, changeless through the changing scene,
The ghostly whisper rings between,
The dark refrain of "might have been".

The race is o'er I might have run :

The deeds are past I might have done ;
And sere the wreath I might have won.

Sunk is the last faint flickering blaze :
The vision of departed days
Is vanished even as I gaze.

The pictures, with their ruddy light,
Are changed to dust and ashes white,
And I am left alone with night.

Jan. 1860

炎の中の顔

夜が近づく、悲しげにそしてゆっくり、
赤い燃えさしの消えかかる光の中で
幻の姿があらわれては消える。

孤島のような農園——海のようにひろがる麦畑が
朝の風に動きだす
そこがぼくが生れたしあわせなところ。

絵はその場で色あせ
私は光の中で見たように思う
ある顔のうつろいやすい似すがたを。

はじめは幼な子のすがた
赤い唇をとがらせキスをせがむ
風で髪をもつれさせて。

次はまじめなやさしい少女
自分の美しさになかばおののき
ためらいがちにとどまっている。

ルイス・キャロルの子ども時代

ああ、時は若く、人生は暖かだった
ぼくが初めてあの妖精のような姿をみたとき
黒髪は風にもてあそばれていた。

その血管はのびやかにうっていた
ぼくが最後にあのやさしい少女に会ったとき
そして手と手を重ねたとき。

黒いまき毛は灰色にかわり
そしてあの人は見知らぬところへ行ってしまった
いまぼくのものでいてくれたらよかったのに。

いとしいひとよ、ぼくのものでいてくれたらよかったのに
いく年もいく年も、しあわせの年がつづくよう
ここに、ぼくのそばにいてくれたらよかったのに。

うつりゆくものの中で変わらずに、いつも
亡霊のささやきが闇のなかから
「そうになっていたかもしれない」とくりかえす。

だが走れたかもしれないレースはおわり
出来たかもしれないことどもはすぎ去り
頭にのせたかもしれない花輪は枯れる。

ちろちろと燃える最後の火も消え
過ぎた日のまぼろしも
ぼくの目の前で消えてゆく。

赤い炎にてらされたかずかずの絵は
もえつきて白い灰になり
夜、ぼくはひとりとり残される。

R. L. グリーンは、この詩について、第二連はディアズベリーでのキャロルの幼き日の正確な回想になっているが、他の大部分は完全なフィクションであるといっている。

燃えている炉に追憶のイメージを重ねるテーマは、詩人のよくするところで、ロンサールも“エレヌのソネット”で次のようにいう。

老いはてて、ゆうべ、ともしびのかげ、
炉べにすわりて、繰りつ、紡ぎつ、
わが詩をうたい、愕然と汝はも言わん、
「過ぎし日の 美しき吾を讃えしはロンサール」

かかるとき、はや疲れたる重き臉の、
うつらうつらにききとめて、ロンサールの
ひびきを耳にまなこさめ、朽ちぬほまれの
汝の名を讃えざるはしためありや。

われすでにみまかりて、骨もなき亡霊となり、
天人花のかげ、土深くやすわらん。
汝は炉の辺にくぐまる老婆、

わが愛と汝が驕慢をくやみつつ。
生きよ、われを信じたまわば、あすをたのむな、
今日よりぞ摘め、いのちのばら。

(1578)

(『ロンサール詩集』井上究一郎訳、岩波文庫、(1974)より)

ウォルター・ペイターは、その著『文芸復興』のなかの「ジョワシャン・デュ・ペレー」でロンサールの生と詩のあり方を次のように語っている。

白砂のながい河原をひろげる大きなロワール、その支流の小さなロワール、あちこちに水門と、あれ草の道と、なかば荒廃に帰した封建時代のくずれた壁をめぐらしてひっ

そりと静まる古い館とをもったヒースの生い茂る高地、大西洋そのもの前ぶれのように広大な起伏をみせて波うつ麦畑のひろがるラ・ボース平野。ロンサールの詩はまたこの地方の風習に満ちている。デュ・ベレーやロンサールが庭をいじり、犬をつれて猟にゆき、また雨の日は家で遊びをしている姿が見える。そしてこれらのすべてには南ヨーロッパよりも北ヨーロッパの家庭的な親しさ、質朴さ、善良さが結びつけられている。(同上、訳注 p. 163)

これをそのまま北イングランドのキャロルにあてはめるわけにはゆかないが、見逃すわけにもゆかない。宮廷につかえるロンサールは、やはり王母につかえる侍女エレーヌに恋をするが、はたせず、エレーヌの追憶を詩の中で永遠化したのがさきの詩である。

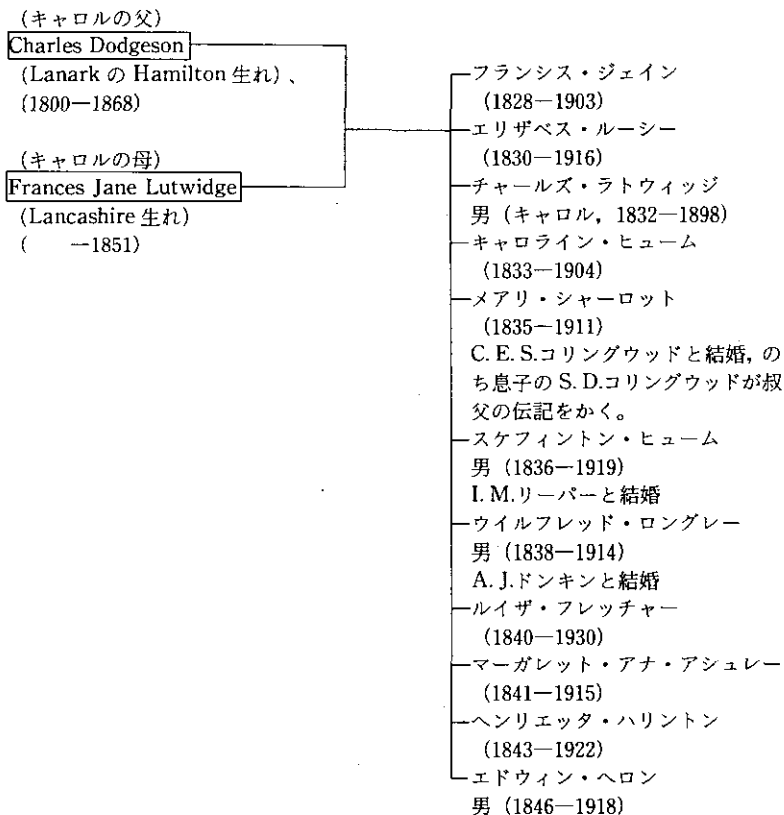
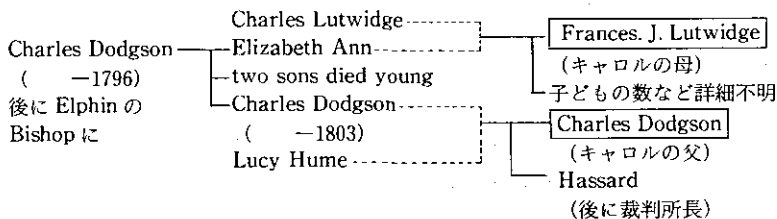
キャロルの「炎の中の顔」はその改作前の詩において、母を恋うる歌であると高橋康也氏は解釈しているが(『ルイス・キャロル詩集』築摩書房、1977、P. 129)、幼な子を母の若い時の姿と見ることに無理はないだろうか。すくなくとも改作後のものは、恋した人への思慕とみるべきであろう。

5

ドジソン夫妻には、当時健康な夫婦がそうであったように、次々と子どもが生まれ、1828年から1843年までの間に、ディアズベリー牧師館で十人を、そして十一人目を1846年に次の任地クロフトで生み、男四人、女七人の子どもを育てることになる。キャロルは1832年1月27日第三子で長男として生れ、同年7月11日に父親の教会でジョージ・ヘロン牧師により洗礼をうけている。

6

次にハドソンの記述をもとにしてドジソン家の家系を図示してみる。



7

ドジソン家の子どもたちの最初のコミュニティーとなるディアズベリーは農村で、穏やかで肥沃なその土地は、野生の花がからまり咲く低木にかこまれた、さながら緑と茶と黄色のパッチワークのようなところであった。穀類とじゃがいもが主な産物で農家は牛や豚を飼い、パン、チーズ、バターミルクなど食糧は自給であった。農耕は厳しいもので、男も女も子どもも、朝早くから夜遅くまで働く毎日であった。ドジソン家もこの生活リズムにならぬ、早起きと夜遅くまで働く生活の仕方は、そのまま後のキャロルの生活のリズムとなった。隣のモルフアニー・ホールにはジェイムズ・ダービーシャー夫妻が住んでおり、ダービーシャー夫人をドジソン家の子ども達は“ダーおばさん”と呼んで親しんでおり、そこの男の子たちとは遊び仲間であった。彼らは木のぼりをしたり、泥灰土採取場や鉱山の廃坑に入ったり、ローム土壌を掘り肥料のつもりでばらまくなどして遊ぶ。モルフアニー・ホールの濠のまわりには灯心草が密生し、幼ないキャロルはそれを集めて皮をむき、芯を貧しい人たちにあげようとしたこともあったという。

召使いのいるドジソン家でさえ家事は煩雑で時間を要したので、大家族をかかえていたドジソン夫人は、一日中家事に専念しなければならなかった。そのため年長の子どもたちは、幼い弟妹たちの面倒をみることをごく自然に身につけた。男四人、女七人という女の多いきょうだいの中で、少女たちを楽しませる才能の片鱗を、キャロルはすでにディアズベリー時代に発揮している。また、弟妹たちの生き生きした好奇心がキャロルのそういった才能に火をつけ、後の底知れない空想力のみなものにもなった。

謹厳な牧師の長男としてキャロルは幼児期から教会の行事に参加するよう訓練づけられていた。日曜日には二度、召使いも含めて家族全員が、田舎道を二キロあまり歩き、教区のはずれで行われる集会に出席するのだった。そこの古めかしい四角い塔に、鐘を打つ人たちのための、ディアズベリーという文字を読みこんだアクロスティックが刻まれていたが、これもキャロルの詩心をかきたてたものの一つだったろう。後に子どもたちのために数多くのアクロスティックを書いているキャロルであるか

ら。

Dare not to come into this Sacred Place
All you good Ringers, but in awfull Grace.
Ring not with Hatt, nor Spurs nor Insolence.
Each one that does, for every such offence
Shall forfeit Hatt or Spurs or Twelve Pence.
But who disturbs a Peal, the same Offender
Unto the Box his sixpence shall down Tender.
Rules such no doubt in every Church are used
You and your Bells that may not be abused.

何人もこの神聖なる場所に入つてはいけない
汝、善なる鐘打ちよ、もし畏敬の念を持たないならば。
帽子をかぶり、拍車をつけて、あるいは大それた気持で鐘
をならしてはいけない。
そんなことをして違反したものは誰でも
罰として帽子か拍車か20ペンスかをとり上げられる。
はたまた鐘の響きを乱して違反したものは
この箱の中に6ペンスを入れなければならない。
これらの規則はいずれこの教会にも通用するものであるから
汝、むだ金をついやさないように、そしてみだりに鐘をな
らさないように。

8

実際、クラークの示す事実は、ひとつひとつはばらばらな事柄であつても、こう見てくると、キャロルをとりまくディアズベリーーの風景はなんと『鐘の国のアリス』の舞台に似ているのだろうと思わずにはいられない。第二章で赤の女王に出会い一緒に眺めるチェス盤は、テニエルも挿絵で描いているように、自然の風景そのものなのである。この場所に関して R. L. グリーンは、オックスフォード大学出版のワールド・クラシックス版『アリス』(1982)の注で、かつてキャロルがクライスト・チャーチ学寮長ヘンリー・ジョージ・リデル家の姉妹(『アリス』のモデルの

アリス・リデルら)とピクニックに行ったことのある学寮長の両親の家のあるチェルトナムの丘陵地帯の景色を思い出して『ふしぎの国のアリス』の手法で書いたもの、と説明している。しかし、キャロルの示す風物の一つ一つに、我々が親しみを感じるのは、そこに故郷の自然を含めて、子ども時代に培われた、もっとスケールの大きい彼の自然観が反映しているからではないだろうか。

さきに示したアクロスティックは、古来、古典詩や旧約聖書によく用いられた手法で、ヘブライ語の旧約聖書ではよく見られるものである。『鐘の国のアリス』の跋詩に、アリスのフルネーム Alice Pleasance Liddell をよみこんだものが、また長編小説『シルヴィーとブルーノ』(1889年)の献詩に、『アリス』上演(1888)の際主役を演じた女優 Isa Bowman をよみこんだものなどがあり、それぞれ、読者にキャロルの別な一面を示すものとして注目にあたいする。

A BOAT, beneath a sunny sky
Lingering onward dreamily
In an evening of July—

Children three that nestle near,
Eager eye and willing ear,
Pleased a simple tale to hear—

Long has paled that sunny sky:
Echoes fade and memories die:
Autumn frosts have slain July.

Still she haunts me, phantomwise.
Alice moving under skies
Never seen by waking eyes.

Children yet, the tale to hear,
Eager eye and willing ear,
Lovingly shall nestle near.

In a Wonderland they lie,
Dreaming as the days go by,
Dreaming as the summers die:

Ever drifting down the stream—
Lingering in the golden gleam—
Life, what is it but a dream?

夏ぞらのもとにボートはゆれ
夢見るようにもためらっていた
とある7月のゆうぐれ—

身じかに三人の子どもは坐り
かがやくひとみとすなおな耳で
わたしの話を聞きほれていた。

その青ぞらもいまはうすれた。
こだまはたえ、おもいでもほろび
夏はきびしい秋の霜に追われる。

けれどいまもなお、まぼろしのよう
うつつの目にはうかがえぬ空のもと
アリスはわたしをおとずれてくる。

かがやくひとみとすなおな耳の
あの子どもらも、わたしの話を聞こうとして
身をすりよせてくればよい。

ふしぎの国で、子どもらは夢を見ながら
眠っている、過ぎ去る日々のかたわらで、
眠っている、ほろび去る夏のかたわらで。

ながれをただよいくだりながら—
金いろのひかりのなかにためらいながら—
いのちとは、夢でなければ、なんなのだろう？

(『鐘の国のアリス』生野幸吉訳、福音館書店、1972、pp. 221
—222)

* * *

Is all our Life, then, but a dream
Seen faintly in the golden gleam
Athwart Time's dark resistless stream?

Bowed to earth with bitter woe,
Or laughing at some raree-show,
We flutter idly to and fro.

Man's little Day in haste we spend,
And, from its merry noontide, send
No glance to meet the silent end.

これは詩行のはじめと更に各連の最初の三文字（アンダーライン箇所）
にもアイザ・ボウマンの名を読みこんだダブル・アクロスティックにな
っている。

われらの人生は、するとすべて夢にすぎないか
金色の光のなかにほのかに見え
時の暗く抗いがたき流れをよぎる夢か？

辛き悲哀に頭^{こぶ}をたれ
のぞき眼鏡に笑いたわむれ
われらは無為にうろうろするのみ。

人のささやかなる1日をわれら慌しく過ごし
その陽気な真昼より

静かなる終わりを迎う一瞥をも送らず。

(『シルヴィーとブルーノ』柳瀬尚紀訳、れんが書房新社、
1976、p. 3)

なお、1982年、キャロル生誕150年の年、ウエストミンスター寺院の poet's corner に彼の記念碑が建てられ、詩人としての名を不朽のものにした。ルイス・キャロル協会発行の雑誌 *Jabberwocky* が伝えるところによると、12月17日にその除幕式が行なわれ、石碑は、イングランド北西部の湖水地方でとれた緑色の石でできており、'Lewis Carroll' と大きく円形にかかれ、その中心に、'Charles Lutwidge Dodgson, 1832—98' とかかれ、さらに一番外側は 'Student of Christ Church, Oxford, buried at Gildford' と、さきに示した『シルヴィーとブルーノ』の献詩の第一行 'Is all our life, then, but a dream?' とでかこまれたデザインだそうである。そして、パイロンとディラン・トマスの間で、さらに両側に T. S. エリオットと H. ジェイムズとつづく位置にある、ということである。

9

ドジソン家の日曜日は、他のイギリスの家庭と同様に、厳格に安息日を守った。乳母のメアリ・クリップや他の召使いたちも安息日を守ることができるよう、労働を最小限にするために、前もって周到な準備がなされるのであった。礼拝と日曜学校の間自由時間でさえ、絵をかいたり、おもちゃで遊んだりすることは禁じられ、ただひたすら宗教の本を読むことが奨励された。「人は神のみことばを読むよう勧められ、奨励される」という福音をのべ伝える手がきのカードがキャロル専用の小さな布袋に入っているものや、日曜日のための彼の個人用の祈禱書「神よ今日の主の日を聖なるものにするため力をかけて下さい。この世的な考えや思いをすてて真剣にわたしたちの不滅の魂の益になるようにつかえることができますように。……今日うけた教えを記憶し、それによって益を得ることが出来るよう恵みを与えてください。」などが、ドジソン・ファミリー・コレクションに残っている。

ドジソン家が当時としてはことさら厳格な宗教教育に徹していたというわけではないとはいっても、このような訓練をうけて育った子どもが

大人になって宗教的な悩みをもち、眠れない夜を過ごすことがあったとしても驚くにはあたらない。1893年キャロルは *Pillow Problems* (『枕頭問答集』)の序文で、眠れない夜に、精神衛生上よくない考えに悩まされないようにするための一種の作業療法として、数学の問題を解く効用をのべている。

かたい信仰すらも根こぎにしそうな懐疑的な考え、最も敬虔な魂にさえ入りこんでくる冒瀆的な考え、純粹でありたいと思う心を悪意に満ちた態度で苦しめる不信心な考え、これらのものに対抗するには、知的な作業をすることが何よりの助けになる。

ディアズベリ時代、ドジソン家の子どもたちは両親による家庭教育を受けていた。母親はキャロルの育児日誌をつけており、それは〈宗教的な本を読む、一人で〉、〈同じく、母と一緒に〉、〈毎日の読書、ためになるもの、一人で〉のような三項目に分けられていたという。7歳でJ. バニヤンの『天路歷程』や聖書物語などを読み、日曜ごとに、母の膝でベイカーの『聖書人物伝』や『青少年日曜文庫』などを読んだ。

その他ドジソン家の子どもの本棚につらな作家たちには、ハナ・モア (Hannah More, 1745—1833)、メアリ・バット・シャーウッド (Butt は旧姓、結婚後は Mary Martha Sherwood, 1775—1851)、マリア・エッジワース (Maria Edgeworth, 1767—1849) などがおり、彼女たちの作品はいずれも主として正直、勤勉、従順、つつましきといった当時の一般的な徳目を強調した内容のもので、現実の生活の場面で社会の上層階級の悪人が思いがけなく登場して、悪がほろび、善が報いられるという筋立てのものである。

ハナ・モアはロンドンで作家生活に入るが、1789年姉妹でサンデー・スクールを開校し、のち Cheap Repository Tracks という小売店のための安い小冊子シリーズを発行し、労働者階級の子どもたちやサンデー・スクールの子どもたちのためのテキストとした。1795年から8年まで、シリーズ114冊のうちのほぼ半数を彼女が書いている。中で最もよく知られているのが1795年の『ソールズベリー平原の羊飼』である。幼いキ

キャロルもそれを熱心に読み、のちにパロディをかいている。『ソールズベリー平原の羊飼』は、一人の節度ある羊飼いが、いざりの妻と三人の子どもたちと、貧しいわらぶき小屋に心しあわせにくらしている。親切な紳士が羊飼いの信心深さ、勤勉さ、つつましさ、明るさに心を打たれ、彼にクラウン銀貨を与える。羊飼いはそれを、家族のための食べものを買うかわりに、医者への借金返済にあてる。教区牧師が亡くなる時、羊飼いは善行が報われて職業と家を与えられ、彼はそこに日曜学校をたてる。といった筋である。

同シリーズでキャロルが読んだ別な本に『チープサイドの徒弟』がある。これは十九世紀の初頭、公共劇場がとりわけ悪評をかっていた、ということをも具体的に示している。「私の身の破滅は劇場の近くをぶらついたことによる」とフランシス・H氏は言う。「私は行いが立派でよく出来た若者であったが、このことが不幸にも夜ごと劇場や劇場の通りにたむろすみじめな女たちの一群の注目をひくことになった。」みだらな女たちとつきあい、子どもをこしらえ、お金を浪費し、そしてとうとう強盗をはたらき、有罪の宣告をうける。死刑執行の前の晩、彼はざんげして次のような神をたたえる歌をかく。

…人の世のおきてにより死の宣告をうけて
 私は判決が正しいと告白する
 あたたかい慈悲で、なんじ
 ただ一人私の信頼する人よ、私の申し立てをさばいて下さい。

こういった劇場不信の風潮は、ヴィクトリア朝の初期には深く浸透しており、十九世紀の中頃になってもなお劇場にゆくことが即、聖職につくための資格剥奪を意味していた。このことをキャロルはずっとあとになって知ることになる。

ハナ・モアやその同時代の作家たちの物語に対する、最もきびしい批評の一つは、彼らが無意識に社会の階級組織を生み出して、下層のきびしいつらい生活は、神さまが貧乏人のために、自然のめぐり合せとして定めたことなのだ、ということをも容認してしまっている点に対するものであった。苛酷な手仕事は子どもにとってよくないとは必ずしも考えら

れてはおらず、『ランカシャーの炭坑の少女』では、九歳と七歳の姉弟が一日じゅう採炭切羽からたて抗の抗口まで石炭のかごをひきずっていく場面がある。このように酷使されていた子どもの窮状にたいして、物語は何も救済策を示さなかった。幼いキャロルは、旺盛な想像力を働かせてそれらを読み、貧しい人を助けたいと、ごくあたりまえに感じていたようではあるが、彼の関心は個人的によいことをしよう、というぼんやりした気持以上のものではなく、大人になって彼は、何か出来るかもしれないと思ってもむだである、と強く感じたために、そういった問題は現状そのままを受入れるようになった。1856年彼は、チャールズ・キングズレーの小説『オールトン・ロック』（1850年）を読んで一月七日付の日記に次のように記している。

この小説は貧しい人の窮乏とみじめさをよく描いているが、私としては、彼はあるはっきりした救済策を示すべきであったと思う。とくに仕立屋やその他の商売の不法な搾取のしくみに代わるものは何かを、私たちに示してくれるべきであった。この本がもう少し明確なものをもっていれば、社会改革の運動（筆者注・チャーティスト運動）に加わる多くの労働者に大きな影響を与えただろう。神よ、あなたのよき摂理によって、今後私があのような労働者になれますように。

でもどうやって？それぞれの妙案があるはずだが、ただガヤガヤ言うだけでは無為である。犠牲によって真に効果的な何かが約束されるなら、私はよろこんで費用を使い、私自身をも使いつくそう。そして避けがたい巨大な車輪の下じきにだけはならないようにしよう。（『キャロル日記』、p. 71）

10

最後の引用は、二十四歳のキャロルのかなり内省的な読後感であるが、若いキャロルが、キングズレーの提起した当時の社会問題にやや回避的な態度をもってしているのは注目すべきである。『水の子』（C. キング

ズレー、1863)と『ふしぎの国のアリス』(L.キャロル、1865)との根本的な違いでもあろうか。ともあれ1856年という年は、筆名をルイス・キャロルと定めた年で、駆け出しとはいえ、もの書きとしての自負もあったのかもしれない。

ところで、幼ないキャロルの眼にうつる‘日曜日の牧師館’とは一体どんなものであったのだろうか。彼の受けた家庭教育についての記録からは、毎日が宗教教育の連続であったようだし、日曜日で安息日とはいっても、一心に神につかえるための身体の安息という意味であるとするならば、いくら道徳、宗教教育万般の時代とはいえ、それらが子ども心にどう作用したか、は気になるところである。が、『ふしぎの国のアリス』を読んで、我々が‘ふしぎの国’の中に、イギリスのありのままの姿が裏にひそんでいるのをさぐりあてるのと同じ方法で、日曜日の牧師館で、キャロルは‘ふしぎの国’をしっかりと体験していたにちがいない。トランプや鏡などたくさんの小道具をかくし持って。この日曜日の牧師館の秘めごとこそが、のちのキャロルに絶大な影響を及ぼしていることは疑う余地がない。

クラークは、ドジソン家の宗教教育の様子や子どもの本のリストをあげているが、こうしてみると、ヴィクトリア時代の世相がはっきり浮き彫りにされてくる。ピューリタンの道徳観がたてまえとして横行していたわけである。それは、ベルグソンのいう‘虚脱’や‘転位’現象にむかう一歩手前の状態である。1841年には時代への反動としての諷刺雑誌『パンチ』が創刊され長く読まれつづける。1846年に出たエドワード・リアの『ノンセンスの本』もイギリス国民の、平衡感覚を保持するための時代の産物といえるだろう。

当時、女流作家たちの「上品な」、「とりすました」文学はイギリス文学の主流となっていたが、クラークの示すドジソン家の本のリストからも明らかなように、子どもの本にも、もっぱら同じような傾向があった。リアがノンセンス詩の先鞭をつけてのち、キャロルがノンセンス文学史で彼と肩をならべるのはもう少し時を待たねばならないが、子どものキャロルの目は、見てしまった者の目で目の窮屈な重圧をひっくり返し、‘さかさまの世界’(アダユナタ)をつくり出す機をうかがっていたにちがいない。

子ども時代のキャロルをとりまくこういった状況にてらし合わせて初めてわれわれは、彼のパロディ、例えば『ふしぎの国のアリス』二章の‘わにの歌’を玩味することができる。つまり、十八世紀の讚美歌作詞家アイザック・ワッツ（1676—1748）の、当時よく知られた讚美歌「怠惰と悪戯のいましめ」（1715年版、「子どものための聖歌集」）

How doth the little busy bee
Improve each shining hour,
And gather honey all the day
From every opening flower !

How skillfully she builds her cell !
How neat she spreads the wax !
And labours hard to store it well
With the sweet food she makes.

ごらんかわいいみつばちが
朝から晩までやすみなく
せっせと蜜をあつめてる
花から花へ、また花へ

なんて上手に巣をつくる
きれいに蜜ろうひろげてる
せっせと蜜をためようと
おいしい蜜よ、甘い蜜

をうたおうとして、

“How doth the little crocodile
Improve his shining tail,
And pour the waters of the Nile
On every golden scale !

“How cheerfully he seems to grin,
How neatly spreads his claws,
And welcomes little fishes in,
With gently smiling jaws!”

ごらん、かわいいわにさんが
光るしっぽをみがいてる
そしてナイルの川水を
金のうろこにかけている

ごらん、かわいいわにさんが
つめをひろげてわらってる
かわいいさかなをのみこもと
あごをしずかにあけている

(高杉一郎訳『ふしぎの国のアリス』、講談社文庫、1983)

になってしまうのを。

11

キャロルの生地チェシャー州とチェシャー猫との関係は、ティアズベリー時代のキャロルを調べるものをふるいたたせる。どうして‘チェシャー猫’というようになったか、を説明する最も説得力のあるものは、主都チェスターに住むジョン・キャザレルにまつわるものである。彼の紋章には1304年という年号と猫がかかれており、彼は怒ると歯をむき出す (grin) くせがあった。また彼はチェスターの街を弁護しつつ死んだので、その名誉をたたえ、それ以後チェシャーチーズは猫の形につくられ、しかもにっこり笑って (grin) いるのである。

12

クラークは自信をもってこのように言うが、さてどうであろうか。ちなみにオックスフォード・ワールド・クラシックス版『アリス』の R.L. グリーンが‘チェシャー猫’につけた注を見ると、

1850年から52年にかけて雑誌 *Notes and Queries* に‘チェシャ猫のような笑い’という成句の起源に関する投書があった。そこではさまざまな理由があげられた。

- 1) チェシャー州はあごの形をしているから。(そのため顎州と呼ばれることもある。)
- 2) チェシャーチーズは猫の形につくられていたから。
- 3) 看板書きが吠えるライオン(英王室の紋章にあるような)を描こうとしたが、出来たものにはやにや笑っている猫にしか見えなかったから。リデル家の紋章が三頭のライオンの頭をあしらったものである、ということも心にとめておく必要がある。

3)が一番もっともらしい。ウィラールのプリムステージの塔の下の地下室にある彫られた頭を証拠として出してもよい。それはあきらかに吠えるライオンか、ひょうを表わしているのだが、あまりにやにや笑いの猫に似ているので、その宿屋(1910年とりこわされた)は‘赤猫屋’と呼ばれ、猫を宿屋のしるしとして使っていた。

キャロルは *Notes and Queries* を創刊からずっと予約購読していた。彼のものとはっきりわかるセットは現在オービー夫妻が所蔵している。(同書 p. 257)

ということである。クラークの示した説は、グリーンの示した2)の起源にせまっている、という点で興味深いが、それ以上ではない。グリーンの説明は、お国自慢めいてはいるが、3)とその証拠物件のくだりは圧巻である。

13

ヴィクトリア朝時代の人間として、ドジソン師は、彼の教区民の脚の形や、寝床での出来ごとなどを詮索するわけにはいかなかったが、彼のユーモア感覚は鈍くはなかった。逸話がうまく、リラックスしている時の彼のウィットやユーモアは牧師仲間でも評判だった。

1840年キャロル八歳の時、旅先のリーズから父親がキャロルに送った

手紙には、ドジソン師のノンセンスの才能が如実に示されている。

…お前にたのまれたもの忘れちゃいけないよ。リーズにつくや否やパパは道の真ん中でどなってやろう。やい金物屋つてね。六百人からの人間がたちまち店からとびだしてくる、鐘をならし、おまわりさんと呼ばひ立て、上を下への大騒ぎさ。おれ様はやすりにねじ回しに指輪が欲しい、すぐ持つてこないと四十秒以内に猫いっぴき除いてリーズの町を皆ごろしにするぞ。なんで猫いっぴき残すかって。そいつを殺しているひまがないからさ。そこで町の奴らはべそをかいたり髪のをむしったりだ。豚も赤ん坊も、ラクダもちょうちょうもどぶの中にくろげこむやら、ばあさん連中は煙突をかけ昇り、雌牛がそれに続くやら。あひるはコーヒー茶碗にかくれるし、ふとつたがちょうは自分をしぼって筆箱になっちゃうし、とうとうリーズの市長まで彼の最期をまぬがれようと、スープ皿の上でカスタードだらけ、アーモンドだらけで見つかった。………奴らはとうとうパパの注文したものをもってきた。それでパパは町に害を加えず、五十台の車にのせ、一万人の護衛をつけて、やすりとねじ回しに指輪を、パパからチャールズ・ラトウィッジ・ドジソンへのプレゼントとして送り出すのさ。

(『ルイス・キャロルの生涯』、ハドソン著、高山宏訳、東京図書、1976、pp. 23-24)

父親のこの才能はキャロルに受つがれ『アリス』物語の幼芽になった。

キャロルのきょうだいは、表面的には同じような刺激を等しく与えられていたわけだが、キャロルにくらべてきょうだいたちは活力に欠けていたようだ。姉妹たちは因襲的なヴィクトリア朝の社会の枠に縛られて、少しのたしなみと慈善奉仕の生活を運命づけられていた。フランシスは音楽と植物、エリザベスは文学批評と創作、メアリは翻訳と絵画と芸術一般、ルイーザは数学、といったようにそれぞれの好みはあったにもかかわらず、文学の分野での力は萎縮してしまった。スケフィントンは牧

師になり、大家族を擁した点で、父親に一番似ていた。エドウィンは宣教師となってザンジバルやトリスタン・ダ・クーニャ島に赴く。キャロルをのぞけば一番の話し上手はウィルフレッドで、一番快活で趣味もひろく、きょうだいでただ一人商業の道に入る。

ディアズベリー時代、ドジソン師はキャロルの将来を自分と同じようなものにと望んだが、経済的な苦しみの点で悩むこともあった。そんな時ドジソン師は、彼を尊敬していたディアズベリーの大地主エジャートン卿の推薦でヨークシャー州クロフトの王室下賜のリヴィング職のポストを得る。1843年四月、父だけが新任地へ赴き、家族は十番目のヘンリエッタの生れるのを待ってその年の秋、クロフトへゆくことになる。

結び

このように見てくると、児童文学史の上では、ファンタジーの源と考えられているキャロルではあるが、いまその位置が実は少しちがうのではないか、という疑問が次第に大きくなるのを感じている。キャロルという作家のことを知れば知るほど、そしてまた『アリス』という作品を読めば読むほど、それらはユートピア物語の流れをくんだ二重構造の物語であると思えるのである。イギリスではトマス・モア以来、ユートピア小説がとくにさかんであった。1872年のサミュエル・パトラーの『エレフォン』が、時宣にかなったユートピア小説であったのと同じ意味で、1865年の『ふしぎの国のアリス』も、1872年の『鏡の国のアリス』も、ユートピア物語と考えたほうがよいのではないだろうか。そして、そのユートピア性こそが、『アリス』が時代を超えて読者をつかんでほしくない所以なのではないだろうか。今後さらに追求してみたい問題である。